

『シヴァ・プラーナ』所収の「ヴィシュヴェーシュ ヴァラ・マーハートミヤ」：和訳と註解

著者	宮本 久義
著者別名	MIYAMOTO Hisayoshi
雑誌名	東洋学研究
巻	56
ページ	53(488)-65(476)
発行年	2019
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012574/

『シヴァ・プラーナ』所収の「ヴィシュヴェーシュ ヴァラ・マーハートミヤ」：和訳と註解

宮 本 久 義

1. はじめに

ヒンドゥー教の聖地で最重要なカイラースとアマルナートはほかのどの聖地ともグループ化されていないが、そのほかの代表的な聖地はさまざまな理由でグループ化されている。「三聖地」(Tristhalī、トリスタリー)は、祖先供養をするのにもっとも適した地、「四大神領」(Caturdhāma、チャトル・ダーマ)は、ヴィシュヌ神を祀る強力な聖地、「七聖都」(Saptapurī、サプタ・プリー)は、そこに行けば必ず解脱が得られるという聖地、「七大河」(Saptanadī、サプタ・ナディー)、「七霊湖」(Saptasarovara、サプタ・サローヴァラ)、「九森林」(Navāranya、ナヴァ・アラニヤ)は文字通り大自然と結び付いた聖地である。さらにシヴァ神を祀る「十二の光り輝けるリング」(Dvādaśajyotirlinga、ドヴァーダシャ・ジョーティルリング)、またシヴァ神妃サティーを祀る「五十一の女神の座」(Ekapañcāśacchāktapīṭha、エーカパンチャーシャト・シャークタピータ)などがある。

それらのうちシヴァ神信仰の成立を研究する際の最も重要な資料の一つである「十二の光り輝けるリング」のまとまった記述がみられるのは『シヴァ・プラーナ』*Śivapurāṇa* 第4巻「コーティルドラ・サンヒター」(Koṭīrudrasaṃhitā) 第1～33章である¹。この部分の成立に関してはまだ十分解明されていないが、ヒンドゥー教典学者のハズラ (R. C. Hazra) は14世紀をさかのぼることはないとする²。本稿では筆者が今まで扱ってきた北インドの聖地ヴァーラーナスィー Vārāṇasī の中心に位置するヴィシュヴェーシュヴァラ Viśveśvara (世界の自在神) の縁起譚が説かれる第22章と第23章を取り上げて和訳と註解を行い、その特徴を精査した。

和訳にあたっては、Pāṇḍeya, Rāmatejaśāstri (ed.), 2020 (1968), *Śrīśivamahāpurāṇam*. Kāśī: Paṇḍitapustakālaya. を底本とし、また適宜、*Śrīśivamahāpurāṇam*. 1986, Delhi: Nag Publishers. を確認のため参照した。英訳の、Shastri, J. L. (ed.), *The Śivapurāṇa*. 1969, Translated and Annotated by a board of scholars, Delhi: Motilal Banarsidass. はスタンダードな訳でたいへん役に立った。

2. ヴァーラーナスィーについて³

ガンジス (ガンガー) 川の岸辺に開けたヴァーラーナスィーは、3000を超すヒンドゥー

の寺院や祠を擁し、ヒンドゥー教徒にとって一生のうち一度は訪れたい聖地となっている。この聖地は古代より繁栄し、ヴァーラーナシー *Vārāṇasī*、あるいはカーシー *Kāśī* の名前で有名であるが、宗教文献ではアヴィムクタ *Avimukta* (シヴァ神によって離れられない、見捨てられない [聖地]) やマハーシュマシャーナ *Mahāśmaśāna* (大いなる火葬場) など多くの別名でも呼ばれる。本書では *Kāśī* の派生語である *Kāśikā* という名前も良く用いられる。中世以降はバナラス *Banāras* という名称が広まり、今ではここの住民が一番多く使用する名前になっている。また、外国人にはベナーレス *Benares* という言葉が馴染みやすい。

ヴァーラーナシーの旧市街のなかにシヴァ神を祀るヴィシュヴェーシュヴァラ *Viśveśvara* 寺院がある。現在はヴィシュヴァナータ *Viśvanātha* 寺院と呼ばれることも多く、尖塔が黄金で葺かれていることからゴールデン・テンプルとしても親しまれている。シヴァ神には別名が多く、ヴェーダ時代以来使用されているルドラ *Rudra* をはじめ、ヴィシュヴェーシュヴァラ (世界の自在神)、ヴィシュヴァナータ (世界の主宰神)、アヴィムクテーシュヴァラ (アヴィムクタの自在神) などがある。

ヴァーラーナシーには多くの巡礼路があるが、そのうちもっとも重要なものはヴィシュヴェーシュヴァラ寺院を中心にしてガンジス川の左岸に位置する約90キロのパンチャクローシー *Pañcakrośī* という円環状の巡礼路である。この巡礼路には五つの主要な寺院をはじめ、多くのガネーシャ神 (シヴァ神の息子) やバイラヴァ神 (シヴァ神の怒りの相) の祠が配置され、シヴァ神を中心にしたコスモロジーを形作っている。『マツヤ・プラーナ』などのヒンドゥー教聖典によれば、この巡礼路こそが聖域の結界をなし、その内側にはいつている者は、たとえ罪を犯した者でも死ぬと即解脱が得られると考えられている。今回翻訳したところでは、「パンチャクローシー」は巡礼路としての意味はもちろんのこと、巡礼路に囲まれた結界を意味する場合にも用いられている。

3. 第22～23章の和訳と註解

これより第22章 (「ヴィシュヴェーシュヴァラ・マーハートミヤ中の、ルドラの〔カーシー〕到着の叙述」 *Viśveśvara-māhātmye kāśyām rudrāgamanavarṇana*)

スータが言った。

1. 偉大なる聖仙たちよ、これから大罪⁴を消滅させるヴィシュヴェーシュヴァラのマーハートミヤを説くので、お聴き下さい。
- 2-3. 世界における何がしらの原質と見なされ、また思考と歓喜を本質とするものであり、不変にして永遠であるもの、まさにその独存の〔系統の〕樹に次のもの (子孫) の欲望が起こった。彼はまさに有属性の者として生まれ、シヴァと呼ばれた⁵。

4. その彼は実に男女の姿に分かれて二つのものになった。男性はシヴァ神として知られ、女性は実に女性力（ストーリー・シャクティ）と呼ばれる⁶。
5. 思考と歓喜の本質を持つものからプラクリティとプルシャも生まれた⁷。
6. 最上の聖者たちよ、見えざるその二つのもの（思考と歓喜）から〔生まれた〕自分たちの存在とかの自分たちの父母を観察し、再生族の者たちよ、大いなる疑念を抱いた。
7. その時、無属性の最高のアートマンから声が上がった。「苦行が修されるべきである。そうすれば、至上の創造が〔あるであろう〕。」

プラクリティとプルシャが言った。

8. 主なるシヴァよ、けれど苦行の場所がありません。あなたの命令に従って、我々はどこに居を定め、苦行をなしたらよいのですか。
- 9-10. すると、無属性のシヴァは、輝きの精髓を持ち、5 クローシャ〔の距離〕⁸からなる、吉祥で、必要なものすべてを備えた美しい都を、プルシャのそばの中空に創り、自分もそこに移り住んだ。
11. すると、ヴィシュヌは〔世界〕創造を欲してそこに居を定め、長いあいだ瞑想し、苦行を修した。
12. そうしていると、〔その〕労苦によってさまざまな水の流れが湧き起こり、それによって虚空が満たされて、何も見えなくなってしまった。
13. するとヴィシュヌは〔それを〕見て、「この驚異的な光景はいったい何だ」と不可思議を見て、頭を振った。
14. すると耳から耳飾りが神の前方に落ちた。それがマニカルニカーと呼ばれる大いなる聖地となった⁹。
15. それ（聖地）は水流に浮かびながら〔東西南北〕5 クローシャ〔ずつ〕広がると、すぐに無属性のシヴァにより、三叉戟によって固定された。
16. ヴィシュヌは女性（妃）のプラクリティとともにまさにそこで眠った。シャンカラ（シヴァ）の命令のもと、彼（ヴィシュヌ）の臍〔から伸びている〕蓮からブラフマーが生まれた¹⁰。
17. シヴァの命令を受けて、彼（ブラフマー）は驚異的な創造を行った。〔その〕宇宙卵のなかには14の世界が創られた¹¹。
18. 宇宙卵の広さは、5 億ヨージャナの距離であると、聖者たちによって称えられている。
19. 「宇宙卵の中で業に束縛されている人々は、いったいどのようにして私まで到達できるであろうか」とこのように考えて、〔シヴァは〕パンチャクローシー¹²を解放した。
20. 「このカーシーは世界に吉祥を与え、業を消滅させ、解脱を輝かせ、知識を授ける、

我が愛しき（お気に入りの）ところである。

21. リンガの姿をしたアヴィムクタは至高のアートマン（シヴァ）自身によって創設された。私の部分を持つ者よ、この聖域はあなたによって絶対に捨てられてはならない。」
22. このように言って、シヴァは自ら自分の三叉戟からカーシカーを降臨させ、死すべき者たち（人間）の世界に〔カーシカーを〕解放した。
23. そして、ブラフマーの1日¹³が終了するときでも、〔ほかのすべてが消滅しても〕これ（聖地）は消滅しない。聖者たちよ、そのときにシヴァがそれを三叉戟で支えるからである。
24. 再生族の者たちよ、ブラフマーによって再び世界が創造されると、それ（聖地）はまた創設される。また、まさに〔我々の〕業を引き抜くがゆえに、〔それは〕カーシーと呼ばれる¹⁴。
25. リンガの姿をしたアヴィムクテーシュヴァラ¹⁵は常にカーシーにいて、重罪人をも含む人々に解脱を与える者となっている。
26. 偉大な聖者たちよ、〈神と同じ天界に住むこと〉などの解脱はほかのどこでも得られるが、最高の解脱である〈神と合一すること〉はここでしか得られない¹⁶。
27. ほかのどの場所でも解脱が得られなかった者にとっては、ヴァーラーナシーという都（最後の抛り所）が〔ある〕。大いなる功德が得られるパンチャクロシーは、1億の殺戮者の罪も消滅する。
28. 不死の神々でさえ皆ここで死ぬことを希求する。そのほかの者は当然である。それゆえ、ここは世俗的喜びと解脱を常に与えるものであり、シヴァの愛しきところである。
29. ブラフマーはこの〔都〕を称賛する。同様にヴィシュヌも成就者（スィッド）たちもヨーガ行者（ヨーギン）たちも、聖者や三界に住むそのほかの人々も常に〔称賛する〕。
30. 私は100年かけてさえもカーシーの偉大さをすべて説くことはできないが、できる限り説明しよう。
31. 内に純質（sattva）、外に暗質（tamas）を持ち、カーラーグニ（kālāgni 時間の火）¹⁷という名で知られ、無属性であるとともに有属性であるカイラーサの主¹⁸は、何度もお辞儀をした（敬意を表した）あと、次のような言葉を語った。

ルドラ（シヴァの息子）¹⁹が言った。

32. 偉大な神ヴィシュヴェーシュヴァラ（世界の主）よ、疑いなく私はあなたに属している。偉大なる神よ、あなたはあなたから生まれた私に慈悲を垂れたまえ。母（パールヴァティー）とともにいる神よ。
33. おお、世界の主よ、あなたは人々の安寧のために常にここに留まって下さい。世界の主よ、お願いします、〔世界を〕救うために。

スータが言った。

34. ころを落ち着かせたアヴィムクタ²⁰も眼から涙を流して喜び、何度も何度も懇願してシヴァに言った。

アヴィムクタが言った。

35. 神々の神よ、偉大なる神よ、カーラーマヤに対する治療薬²¹よ、あなたは三界の主であり、まさにブラフマーやヴィシュヌやそのほかの者たちに仕えられるべきである。
36. 神よ、あなたによってカーシーの都に首都を定めて下さい。想像も及ばない喜びのために、私は瞑想に入ります。
37. あなたのみが解脱を与える者であり、世俗的欲求を与える者で、ほかの者はそうではありません。それゆえ人々を助けるために、あなたはウマー (Umā、シヴァ神妃の別名) とともに常にここに留まって下さい。
38. 永遠なるシヴァ (Sadāśiva、シヴァ神の別名) よ、生類を世間の海から救って下さい。ハラ (Hara、シヴァ神の別名) よ、あなたの信徒を救って下さい。繰り返します。

スータが言った。

39. このように、かのヴィシュヴァナータに懇願された、すべての支配者シャンカラ (シヴァ) は、人々を助けるためにまさにここに留まった。
40. シヴァがカーシーにやって来たその日から、カーシーはすべてのものにとって最も素晴らしい場所になった。

以上、吉祥なる『シヴァ・マハープラナ』における第4巻「コーティルドラ・サンヒター」中の「ヴィシュヴェーシュヴァラ・マーハートミヤ」の「ルドラの〔カーシー〕到着の叙述」という名の第22章終わり。

これより第23章 (「カーシーヴィシュヴェーシュヴァラ・ジョーティルリンガ・マーハートミヤ」 Kāśīśveśvarajyotirlinga-māhātmya)

聖仙たちが言った

1. 優れたスータよ、もしヴァーラーナシーがそのような功德を持つ大いなる都なら、我々にその偉大さ (prabhāva、ブラバーヴァ) を説いて下さい、またアヴィムクタの〔偉大さ〕を。

スータが言った

2. 簡潔かつ十全にヴァーラーナシーの素晴らしさとヴィシュヴェーシュヴァラの威光（マーハートミヤ）を語るので、聖仙がたよ、お聴き下さい。
3. あるとき、パールヴァティー女神がシャンカラに喜びとともに、人々の安寧のために、二つのアヴィムクタ（シヴァとヴァーラーナシー）の威光について質問した。

パールヴァティーが言った

4. 「私に恩恵を垂れつつ人々の利益を願って、この聖地の威光を残りになくお話し下さい。」

スータが言った。

5. 女神のこの言葉を聞いて神々の中の神である世界の主は、生類への愛のためにかの妻に答えた。

至高の神が言った

6. よくぞ質問した、愛しき者よ、人々にとって幸福を与える素晴らしきことを。二つのアヴィムクタの威光をまさにありのままに語ろう。
7. このいつも最も秘密の聖地、我がヴァーラーナシーは、まさにすべての生き物にとってあらゆる点で解脱の原因となっている。
8. この聖地ではいつもスィッドタたちが私への誓戒（vrata ヴラタ）を守っている。私の〔天〕界を希求する人たちは、常に様々な〔形の〕リングを身に付けている。
9. 自己を制し、感官を制する者たちは、シュラウタ〔聖典に説かれる〕世俗と解脱の果報を与えてくれる最高のパーシュパタ²²〔の教義〕である偉大なヨーガを修練している。
10. ああ偉大なる女神よ、ヴァーラーナシーに住むことは私にとって常に喜びである。一切のことを捨てて、その理由をしっかりと聴きなさい。
11. 私の信徒と知識を持つ者、この両者が解脱するにふさわしい。両者は聖地を望まず（拠り所としておらず）、決められたことと禁止されたことが等しい。
12. 両者はまさにどこで死んでもかまわない生前解脱者であると知られる。〔両者は〕解脱に到達する。私によって〔この〕確かな言葉は述べられた。
13. アヴィムクタと呼ばれるこの最高の聖地には、特別なものがある。女神よ、最高のシャクティよ、よき心を持つ汝はそれを聴きなさい。
14. すべてのヴァルナ（カースト）と住期（アーシュラマ）にある者、子供、若者、年寄も、もしこの都で死すならば、解脱することは疑いない。
- 15-16. ああ再生族の者たちよ、不浄な者も清浄な者も、少女も婚姻者も、寡婦も子供のいない女性も、月経や欠点を持つ者も、子供を産んだ者も、どのような女性であれ²³、もしこの聖地で死んだならば、解脱することは疑いない。

17. 湿生の者も、卵生の者も、芽生の者も、胎生の者も²⁴、ほかの場所ではだめだが、ここでは死ねば解脱できる。
- 18-19. 女神よ、まさにここでは知識を抛り所とせず、さらに信愛を抛り所とせず、ここでは儀礼を抛り所とせず、布施を抛り所とせず、文化を抛り所とせず、いかなるときも瞑想を抛り所とせず、称名を抛り所とせず、崇拜を抛り所とせず、ましてや出自の良さ〔を抛り所とし〕ない。
20. なぜなら、誰でも解脱を与える私の聖地に住めば、どのように死んだとしても、解脱が得られることは確実であるからである。
21. 愛しき者よ、ここは私の秘密の中の秘密の神々しい都であり、パールヴァティーよ、ブラフマーたちでさえもこの偉大さを知らないのである。
22. それゆえ、この偉大な聖地はアヴィムクタとして知られるのである。ナイミシャ²⁵など〔ほかの〕あらゆるところ（聖地）よりも優れた、死者に解脱を与える〔聖地なので〕ある。
23. ダルマの奥義（究極、秘儀）は真実であり、解脱の奥義は寂静（平等観）である。賢者たちはアヴィムクタを聖所と聖地の奥義と考える。
24. 欲望を享受し、眠り、遊び、様々の行為をなす者は、〔それでも〕アヴィムクタで命を放棄するならば、解脱が得られる。
25. 人間にとっては、数千の悪を行って餓鬼の状態（piśācatva、ピシャーチャ性）になるほうが、カーシーの都〔に行くこと〕なしに、数千の儀式を行って天界に〔行く〕よりましである。
26. それゆえ、あらゆる努力をしてカーシカーに留まるべし。聖仙たちよって未顕現のリングとサダーシヴァが念想されるべきである。
27. おお愛しき者（パールヴァティー）よ、ここで人々が何でも果報を望んで苦行するならば、私はそれぞれの最高の果報を彼らに必ず与えよう。
28. 自分自身（シヴァ神）と合一すること、そののちには望ましい場所も〔与えよう〕。ここで体を捨てたならば、どこからも業の束縛は生じない。
29. 神仙たちを伴ったブラフマー、ヴィシュヌ、ディヴァーカーラ（太陽神）、そしてその他偉大なる魂を持つすべての人はここで私を尊崇する。
30. 心が〔感官の〕対象に奪われた人でも、正しい行いへの興味を失った人でも、この聖域で死んだならば再び輪廻に入ることはない。
31. そうであるなら〔もし彼らが〕執着を離れ、思慮深く、純質を持ち、高慢さを捨てて、さらに敬虔で、〔悪い行為を〕慎む、すべての私の信徒たちならば、なおさらである。
32. 数千の生まれ変わりのなかで、〔ある者が〕ヨーガ行者として生を享け、そしてまさ

にここで死んだならば、最高の解脱に赴く。

33. おおパールヴァティーよ、ここには私の信徒によって建立された数多くのリングがある。〔それらは〕まさにあらゆる願いを叶え、解脱を与えるものである。
34. この聖域は四方に〔それぞれ〕5 クローシャ〔の距離を〕持つものとして称賛されている。そして生類が死ぬときに不死 (amṛta、アムリタ) を与える。
35. 罪なき者が死ぬばすぐに解脱を獲得する。罪あるものが死ぬば、多くの身体 (kāya-vyūha、カーヤヴィューハ) (輪廻) を獲得するであろう。
- 36-37. アヴィムクタと呼ばれるこの聖域で確かに罪 (パータカ) を行った者は、苦痛を経験したのち解脱を得るであろう。1 万年間バイラヴィーの苦痛を受けて、そののち罪を享受して解脱を得る、美しき者 (パールヴァティー) よ。
38. 以上、罪を犯すことに関する顛末があなたに語られた。人はこのように認識して、アヴィムクタに住むべきである。
39. 作られた業は10億劫 (カルパ) 経っても消滅しない。善であれ悪であれ作られた業は必ずや享受されなければならない。
40. そして悪しき業のみが地獄に導き、善なるもの (業) は天界をもたらし。両者の混じったもの (業) によって、〔人は〕人間界に送られる。
41. この世において、誕生は善きもの (業) と悪しきものが優勢か劣勢かに従って生じる。そして両者の消滅が解脱である。これがまさに真実である、パールヴァティーよ。
42. 偉大なる女神よ、束縛をもたらし業は三種類であると儀軌の教典に説かれている。「蓄積されたもの」 (saṃcita) と「現在進行しているもの」 (kriyamāṇa) と「開始されたもの」 (prārabdha) とである。
- 43-44. 前世で生じたものが「蓄積されたもの」と分類される。〔今生において〕身体で享受されるものが「開始されたもの」である。そして、女神よ、今生において善きものであれ悪しきものであれ、いま現在作られつつあるものが「現在進行しているもの」と、賢者たちは知る。
45. 「開始されたもの」の業は享受することによってまさに消滅するのであり、そのほかはあり得ない。〔ほかの〕二つの業の消滅は礼拝 (pūjana、プージャナ) などの方法による。
46. カーシーの都以外ですべての業が消滅することはあり得ない。〔ほかの〕すべての聖地は到達しやすいが、カーシカーの都は到達しにくい。
47. もし前生において敬虔にカーシーを参詣したならば、〔今生で〕カーシーに到達し〔ここで〕死ぬであろう。その逆はあり得ない。
48. カーシーに到達した人は、ガンガーで沐浴すべきである。そうすれば「現在進行しているもの」と「蓄積されたもの」〔の罪〕は完全に消滅する。

49. 「開始されたもの」は享受することなしには消滅しないことは確かである。そしてそれ（享受）がなされたときにそれ（「開始されたもの」）も消滅する。
50. まずカーシーに来て、そののちに罪を犯したとするなら、その（カーシーに来ることという）強力な種子によって、〔人は〕再びカーシカーに導かれる。
51. そのとき、〔彼の〕すべての罪は灰になる。それゆえ人は、必ず業を根絶するカーシーに住むべきである。
52. 愛しき者よ、ただ一人のブラーフマナ（バラモン）でもカーシーに住むことができるなら、人はカーシー住まいを享受して、そののち解脱を得ることができる。
53. もしカーシーでまさに死んだならば、その人は再び生まれることはない。そしてまたプラヤーガで望んで死んだならば、その人には〔望まれた世俗的〕願望と〔解脱という〕果報が〔得られる〕
54. もし〔プラヤーガで世俗的願望と解脱の〕両方が得られるならば、カーシー〔で死ぬこと〕に起因する果報は無意味（無駄）になろう。もし〔カーシーで〕両方が得られないなら、聖地の王〔であるプラヤーガ〕の果報は無意味になろう²⁶。
55. それゆえ、私の命令によって、ヴィシュヌはまさに眼前に新しい創造を行い、思考（マナス）によって描かれたものに形を与え、それをしっかりと完成させた。

スータが言った。

56. 最高の聖者たちよ、以上が善き人に享受（ブクティ）と解脱を与えるカーシーとヴィシュヴェーシュヴァラの様々なマーハートミヤである。
57. このあと、人々がそれを聞いてすべての罪から解放されるトリアンバカのマーハートミヤを私は語ろう。

3. 考察

・第22章は、シヴァ神がどうしてカーシー（ヴァーラーナシー）に来て聖地としたかが語られる。

・まず、第2-7詩節ではシヴァ神の誕生が語られる。「思考と歓喜を本質とするもの」というヴェーダーンタ学派（一元論）のブラフマンの特質をもつものから生まれた直後に、さらに男女に分かれるという経緯は、シヴァ神の両性具有神（アルダナーリーシュヴァラ）としての性質を取り入れたものである。また別に、「思考と歓喜を本質とするもの」から「プルシャとプラクリティ」というサーンキヤ学派（二元論）の最高原理も生まれるという経緯は極めて特殊である。

・第8-17詩節は、シヴァ神が地上に「吉祥で、必要なものすべてを備えた美しい都」ヴァーラーナシーを作る話であるが、ヴィシュヌ神が世界を創造したという以前から伝

わる神話を取り入れざるをえず、ここではその世界創造はシヴァ神が命令したものであるとして、シヴァ神のヴィシュヌ神やブラフマー神に対する優位性を語っている。

・第18-29詩節は、シヴァ神が三叉戟からこの聖地を作ったこと、また世界還滅の日がきても、三叉戟に支えられて沈むことがないことが語られる。このエピソードはこの聖地の住人ならばだれでも知っている。

・第30-38詩節は、この聖地の偉大さをさらに説くところであるが、シヴァ神＝ヴィシュヴェーシュヴァラ神に話を懇願するのが、ルドラ、アヴィムクタ、ヴィシュヴァナータという枠組みになっている。すなわち、ここでのルドラ、アヴィムクタ、ヴィシュヴァナータは、シヴァ神の生んだ、あるいは創った息子ということになっている。

・第39-40詩節は、シヴァ神がここを聖地としたのは、人々を助けるためであることが語られる。

・次に第23章では、シヴァ神と聖地カーシーの両方の偉大さが語られる。

・第8詩節の「常に様々なリングを身に付けている」という記述は、リンガーヤット派の人々だけでなく、現在でも多くの修行者が行っていることである。

・第9詩節のパーシュパタの修行者がこの聖地で修行していたことはよく知られている。

・第14-19詩節ではどのような生まれの者でもこの聖地で死ねば解脱が得られるとする。聖地巡礼を説く聖典では4つのヴァルナ（カースト）以外の「不可触民」にも開かれているといわれることが多い。ここでは「不浄な者」という語で示されている。

・第35-51詩節では、罪と解脱との関係が語られる。罪を犯した結果生じる業の束縛は三種類であることを説き、最終的にはこの聖地に来ることによってすべて消滅するという。

・第53-54詩節ではヴァーラーナシーの西方約120キロメートルに位置し、聖地の王（ティールタラージャ）と言われるプラヤーガ（現在の地名はプラヤーグラージ）との比較がなされている。プラヤーガは現世の喜びと解脱の両方をもたらす聖地であるが、ヴァーラーナシーは解脱のみをもたらす聖地であるとする。しかし、解脱のみを希求する人ならば、ヴァーラーナシーに住めば十分であり、プラヤーガに行く必要はなく、無意味であると言う。プラヤーガに対する強烈な対抗意識が伺える記述である。

以上、若干の考察を記したが、解脱の原因が知識や布施や禅定などというより、シヴァ神の聖地に住むことという信愛が強調されていること、悪人であってもこの聖域内で死ねば解脱が得られることなど、他プラナ聖典に記述されるこの聖地に関する特徴がほぼ網羅され、この部分の成立が相対的に遅いことが予想される。

《参考文献》

・テキストおよび英訳

- Pāṇḍeya, Rāmātejaśāstri (ed.), 2020 (1968), *Śrīśivamahāpurāṇam*. Kāśī: Paṇḍitapustakālaya, *Śrīśivamahāpurāṇam*. 1986, Delhi: Nag Publishers.
Shastri, J. L. (ed.), *The Śivapurāṇa*. 1969, Translated and Annotated by a board of scholars, Delhi: Motilal Banarsidass.

・外国語文献

- Eck, Diana L., 1983, *Banaras: City of Light*. London: Routledge & Kegan Paul.
Hazra, R.C., 1975, *Studies in the Purāṇic Records on Hindu Rites and Customs*. Delhi-Patna-Varanasi: Motilal Banarsidass, 2nd ed.
Rocher, Ludo, 1986, *The Purāṇa*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
Singh, Rana P. B., 2002, *Towards the Pilgrimage Archetype : The Pañcakrośī Yātrā of Banāras*. Varanasi: Indica Books.
Singh, Rana P. B., 2013, *Hindu Tradition of Pilgrimage: Sacred Space & System*. New Delhi: Dev Publications & Distributors.

・日本語文献

- 小西正捷・宮本久義編、1995、『インド・道の文化誌』春秋社。
定方晟、2011、『インド宇宙論大全』春秋社。
菅沼晃編、1985、『インド神話伝説辞典』東京堂出版。
立川武蔵・石黒淳・菱田邦夫・島岩、1984、『ヒンドゥーの神々』せりか書房。
橋本泰元・宮本久義・山下博司、2005、『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版。
宮本久義、2003、『ヒンドゥー聖地 思索の旅』山川出版社。
宮本久義、2006、「『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナシー・マーハートミヤ」について」、『東洋大学文学部紀要第59集〈インド哲学科篇 XXXI〉』、181～200頁。
宮本久義、2007、「『カーシー・ラハスヤ』に見られる聖地巡礼の作法」『東洋学研究』第44号、東洋学研究所、119～130頁。
宮本久義、2007、「『マツヤ・プラーナ』第183章：和訳と註解—『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナシー・マーハートミヤ」について (2)」、『東洋大学文学部紀要第60集〈インド哲学科篇 XXXII〉』、135～158頁。
宮本久義、2008、「ヒンドゥー聖地巡礼の作法—『カーシー・ラハスヤ』中のパンチャクローシー巡礼をめぐって」、『多民族社会における宗教と文化』11号、宮城学院女子大学、19～37頁。
宮本久義、2009、「『マツヤ・プラーナ』第184章：和訳と註解—『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナシー・マーハートミヤ」について (3)」『東洋大学文学部紀要第62集〈インド哲学科篇 XXXIV〉』、120～134頁。
宮本久義、2011、「『マツヤ・プラーナ』第185章：和訳と註解—『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナシー・マーハートミヤ」について (4)」『東洋大学文学部紀要第64集〈インド哲学科篇 XXXVI〉』、179～194頁。
宮本久義、2012、「『トリスタリーセートゥ』における聖地巡礼の規則」『東洋大学文学部紀要第65集〈インド哲学科篇 XXXVII〉』、155～168頁。
宮本久義、2013、「聖地における祖先供養—『トリスタリーセートゥ』368～405の和訳と註解—」『東洋大学文学部紀要第66集〈インド哲学科篇 XXXVIII〉』、179～194頁。
宮本久義、2014、「ヴァイディヤナーテーシュヴァラ・ジョーティルリリング縁起譚」『東洋大学文学部紀要第67集〈「東洋思想文化」第1号〉』、104～114頁。
渡瀬信之訳、2013、『マヌ法典』平凡社。

注

- 1 『シヴァ・プラーナ』に説かれる「12の光輝けるリング」の名称と所在地は以下の通りである。Somanātha (Somnath, Gujarat), Mallikārjuna (Shrīshaila, Andhra Pradesh), Mahākāla (Ujjain, Madhya Pradesh), Ōmkāreśvara (Mandhata, Madhya Pradesh), Kedāreśvara (Chamoli, Uttarakhand), Bhīmeśvara (= Bhīmaśaṅkara, Pune, Maharashtra), Viśveśvara (Varanasi, Uttar Pradesh), Tryambakeśvara (Nasik, Maharashtra), Vaidhyānātheśvara (Deoghar, Jharkhand), Nāgeśvara (Near Dwarka, Gujarat), Rāmeśvara (Rameshvaram, Tamil Nadu), Ghuṣmeśvara (Ellora, Maharashtra).
- 2 [Rocher 1986: 225–226]
- 3 この聖地の巡礼については[宮本 2003: 149ff]を参照のこと。
- 4 大罪 (mahāpātaka) とはヒンドゥー教において最も重い罪とされるもので、『マヌ法典』2.55には次のように説かれている。「ブラフマナ殺し (ブラフマハティヤー)、スラー酒を飲むこと (スラーパーナ)、[黄金] 泥棒 (ステーヤ)、ゲルの妻と交わること (ゲルアングナーガマ)、およびこれらの〔罪を犯した〕者たちと交際することは大罪 (マハーパータカ) と呼ばれる。」(渡瀬信之訳) [渡瀬 2013: 392]
- 5 'yad idaṃ dṛśyate kiṃcī jagatyāṃ vastumātrakam, cidānandasvarūpaṃ ca nirvikāraṃ sanātanam. //2// tasyaiva kaivalyataror dvitīyecchā tato 'bhavat, sa eva saṃyo jātaḥ śiva ity abhidhīyate. //3// 有属性 saṃyo のシヴァ神の誕生が語られるが、このあとの第7詩節では無属性 nirguṇa のシヴァ神も登場する。
- 6 この展開はシヴァ神の特質の一つであるアルダナーリーシュヴァラ (ardhanārīśvara、両性具有神) を語っている。
- 7 思考 (cit) と歓喜 (ānanda) はヴェーダーンタ学派の最高原理であるブラフマンの性質を示し、プルシャ (puruṣa、純粹精神) とプラクリティ (prakṛti、根本原質) はサーンキヤ学派の二元論の核をなす2つの実在で、ここでは様々な考えが重層的になっていると考えられる。
- 8 クローシャ (krośa) は距離の単位で、異説はあるが、約3.5キロメートルである。
- 9 Maṇikarnikā は Viśvanātha 寺院から歩いて10分ほどのガンジス川の岸辺の火葬場である。
- 10 ヒンドゥー教の神話では、世界の創造神が誰であるかをめぐるブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神のあいだの確執を語るものが多くある。ここでは、元来創造神と考えられてきたブラフマー神もヴィシュヌ神から生まれたものであり、さらにヴィシュヌ神もシヴァ神の命令を受けて世界を創造したのだというヒエラルキーが説かれている。
- 11 『ヴィシュヌ・プラーナ』によれば、ブラフマー神の創造した宇宙卵 (brahmāṇḍa) の内側に7層の世界があり、殻外に7層があるとされる。また、殻外の一番外側の層は無限の厚さのプラクリティから成るとされる。[定方 2011: 42–44]
- 12 「パンチャクローシー」とは5クローシャの距離のことであるが、ここでは半径5クローシャの円環状の巡礼路、さらにはそれに囲まれた聖地のことを指すと考えられる。
- 13 ブラフマー神の1日は1劫とも呼ばれ、人間の年に換算すると43億2千万年である。[橋本等 2005: 70–71]
- 14 'karmaṇā karṣaṇāc caiva kāśīti paripaṭhyate.' 「カーシー」の通俗的語源解釈の一つである。
- 15 Viśveśvara と同義。ヴァーラーナシーの主宰神であるシヴァ神のこと。
- 16 プラーナ聖典において説かれる信徒の4つの至高の状態 (four states of beatitude)。sālokyā (神と同じ天界に住む)、sāmīpya (神のそばに住む)、sārūpya (神と同じ姿となる)、sāyujya (神と合一する)。[Shastri 1969: 1341. fn.]
- 17 世界の終末の火であり、シヴァ神の別名でもある。
- 18 シヴァ神の別名。「カイラーサ」は中国チベット自治区南西部に位置し、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教徒、仏教徒、ボン教徒たちが等しく霊山と崇める聖域として知られている。詳しくは[宮本 2003: 111–148]
- 19 Rudra は普通はシヴァ神自身の別名であるが、ここではシヴァ神の息子となっている。
- 20 Avimukta あるいは Avimukteśvara はシヴァ神の別名であるが、ここではシヴァ神によって生

み出された聖地ヴァーラーナシーのことである。

- 21 'kālāmaya-subheṣaja', 英訳は 'good panacea for all the evils of time' とする。[Shastri 1969: 1342]
- 22 Pāśupata. シヴァ派の一派で獣主派と訳される。開祖はラクリーシャで『パーシュパタ・スートラ』を著したとされる。シヴァ神と個我の合一のため、わざと人々の嫌悪する行為をし、誤解から生ずる功德を自分に蓄積するという特異な修行法で知られる。[橋本等 2005: 181-183]
- 23 原文は 'asamṣkr̥tā'. 英訳は 'of whatever nature she may be' [Shastri 1969: 1344] 「どのような女性であれ」となっている。女性が経るべき人生の浄化（通過儀礼）を済ませていなくても、の意味と取った。
- 24 4種類の出生形態については、『マヌ法典』 1. 43-46参照。[渡瀬 2013: 27-28]
- 25 Naimiṣa、あるいは Naimiṣāranya（ナイミシャの森）は聖仙たちによって『マハーバーラタ』などにおいて語り継がれてきた聖地として知られる。現在のウツタル・プラデーシュ州ラクナウ近郊のゴームティー川沿いにある。
- 26 英訳者によれば、文意は以下の通り。プラヤーガ（現プラヤーグラージ）が世俗的願望と解脱の両方を与えてくれ、カーシーが解脱のみを与える聖地であるなら、両方を望む人にはカーシーは役に立たない、つまり無意味である。しかし、解脱のみを願う人には、カーシーだけで十分なので、プラヤーガは無意味である、つまり行く必要はない、ということ。[Shastri 1969: 1348. fn.]

キーワード：シヴァ・ブラーナ、ヒンドゥー、ヴァーラーナシー、聖地、巡礼